



国立大学法人

宮城教育大学 附属図書館ニュース

ISSN 1348-1525

こもれび

KOMOREBI

MIYAGI UNIVERSITY OF
EDUCATION LIBRARY NEWS

No.135

2020.3.18 発行

特集

図書館の バリアフリーを考える

CONTENTS

02 図書館インフォメーション

04 特集 図書館のバリアフリーを考える

08 企画展「学び続ける教師を育てる」

10 学生の読書室

12 子ムエの本棚

児童文学というヒント —灰谷健次郎からはじめて—

16 学修サポーターに聞いてみよう!!

18 図書館スタンプラリー



新入生のみなさん ご入学おめでとうございます!

附属図書館では、みなさんの大学生活が充実したものとなるようサポートします。利用方法を覚え、大いに活用してください!

「スタンプラリー」開催します!

図書館利用初心者の方を対象に、図書館の基本的な利用方法が一通り学べて、グッズももらえるお得なスタンプラリーをご用意しました。詳細は、本誌18ページ以降をご覧ください。グッズは限りがありますので、ご参加はお早めに!なお、上級生の方も参加できます!

「施設予約」はじめます!

図書館内にあるスパイラル・ラボやセミナールームといった個室が「マイライブラリ」から簡単に予約できるようになりました。プロジェクターなどの機器の貸出もしますので、模擬授業の練習やグループ学修等に是非ご利用ください。

利用方法

- ① 図書館ホームページから自分のID/パスワードでマイライブラリにログイン
- ② 『情報』グループにある施設予約リンクをクリック
- ③ 使いたい日時・施設を選んで予約

「新しい設備」導入しました!

図書館では学生のみなさんの様々な学修スタイルに対応できるよう、随時館内設備の見直しを行っています。今回は、座りながらエクササイズができる椅子と、アイデアをぱっと書き込んで共有できるホワイトボードの机を導入しました。勉強や課題の合間に、友達とのアイデア出しに是非ご利用ください。



本を読みながら体幹鍛えませんか?



机に直接書き込むことができます!

「スパイラル・セッション」開催しました!

図書館では、体験型イベントとして「スパイラル・セッション」を開催しています。昨年度は以下の内容で実施しました。今年度も様々なテーマで開催予定ですので、是非ご参加ください。学生のみなさんからの要望や持ち込み企画もお待ちしております。

月 日	タイトル	講師など
6月24日	教員採用試験 合格に向けた3ヶ月	佐藤竜晟さん(学修サポーター)
6月25日	初めてのTOEIC～直前対策!	丸山広輝さん(学修サポーター)
6月26日	先輩直伝! レポート攻略法	我妻眞衣さん(学修サポーター)
6月27日	今、学校図書館にできること ～学校司書の視点から見えてきたこと～	齊藤麻里江先生 (多賀城高等学校主査:学校司書)
7月5日	広げようSDGs! マダガスカル其自然・学校・子供たち	齊藤千映美先生ほか
7月22日	留学生による日本語・日本文化研究発表会	高橋亜紀子先生ほか
9月27日	教育玩具とその時代 -子ども・おもちゃ・教育-	是澤博昭先生(大妻女子大学博物館教授)
10月10日	秋の図書館リコーダーコンサート	宮城教育大学リコーダーず 原田博之先生
12月13日	クリスマスカード・ワークショップ	水谷研究室+情報・ものづくりコース +技術教育専攻の有志のみなさん
12月18日	X'masトーンチャイム演奏会	「子どもと表現」履修者、星律子先生
1月14日	放射線ってなんだろう?	藤倉宏丞さん(学修サポーター)
1月14日	DVDを活用! みんなで英語を使ってみよう!	丸山広輝さん(学修サポーター)
1月15日	再起動! 教採対策	古仲隼也さん(学修サポーター)
1月15日	読書を楽しもう! 児童書の魅力を語る	我妻眞衣さん(学修サポーター)
1月16日	面接力を磨こう!	佐藤竜晟さん(学修サポーター)
1月28日	民俗芸能とジェンダー～東北の田植踊を中心に～	小塩さとみ先生 村山里帆さん(音楽教育専攻4年)

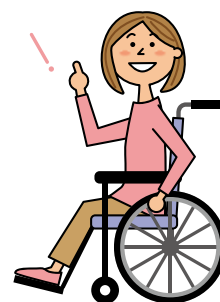


今、学校図書館にできること



マダガスカル其自然・学校・子供たち

図書館の バリアフリーを考える



キャンパスバリアフリープロジェクトの概要

特別支援教育講座 准教授 寺本 淳志

しょうがい者の権利擁護に向けた近年の国内外の動向を受け、本学でも、しょうがいのある学生及び教職員に対する全学的な支援体制の充実が図られてきています。本学では、教員養成大学としての特徴を活かし、それらの取り組みに学生が参加する中で「特別支援教育マインド」を身につけ、今後の共生社会へ貢献できるよう育成を行うことを目指しています。

そんな中、「構内の環境整備」と「学生の育成」の両面を実現すべく、平成28年度からキャンパスバリアフリープロジェクトが実施されています。活動では、ボランティアの学生委員が、大学構内の物理的バリア（しょうがいのある人が利用できない、又は利用し辛い場所）を調査し、その改善策を検討するとともに、教職員を対象とした研修会において報告を行います。

平成28年度は視覚しょうがい者による2号館利用、平成29年度は視覚しょうがい者及び肢体不自由者（主に車いす使用者）による講堂及び体育関連施設利用を想定して活動を行いました。その結果として、2号館や3号館の廊下の特定の場所（分岐点やトイレの前など）への凹凸のある床材（マット）の敷設、体育館における多機能トイレへの改修など、物理的なバリアの解消が実現してきています。平成30年度は視覚しょうがい者、聴覚しょうがい者、肢体不自由者による利用を想定して図書館について活動を実施しました。本稿では、各しょうがいを担当した3つの班の学生委員がそれぞれ報告を行います。

読者の皆さんにお願いがあります。これまでの学生委員は特別支援教育教員養成課程の学生のみで、毎年10名程度とあまり広がりを見せていません。環境的なバリアの解消は、何もお金を掛けた大掛かりな環境整備によるものばかりではありません。周囲の学生や教職員のちょっとした思いやりや言葉掛けによっても、しょうがいのある当事者の各施設での過ごしやすさは大きく変わる可能性があります。インクルーシブ教育が推進される現在、このような活動に参加することは、今後学校現場で出会うであろうしょうがいのある子どもたちの過ごしやすさについて考える上でも貴重な機会となることと思います。是非、今回の記事をきっかけに、活動に興味を持っていただければと思います。

支援活動に興味のある方へ

支援活動はしょうがいのある学生だけでなく、支援する学生にとってもたくさんの学びを得る機会です。ぜひ一緒に活動してみませんか？少しでも興味のある方は、「しょうがい学生支援室」までご連絡をお願いします。

HP

<http://shienshitu.miyakyo-u.ac.jp/>

電話

022-214-3651（受付時間：平日午前9時～午後5時）

メール

Support-Coordinator@ml.miyakyo-u.ac.jp

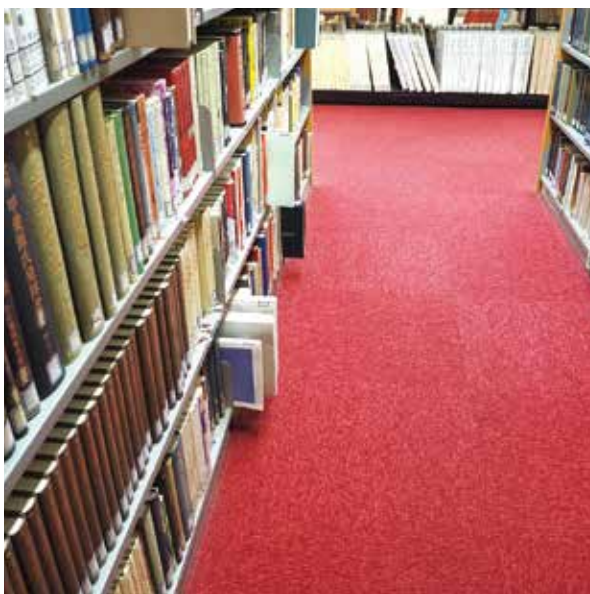


視覚しょうがい班

私たち視覚しょうがい班は、視覚しょうがい者が附属図書館を利用する際のバリアと、それに対する改善案について考えました。調査の結果、視覚しょうがい者が利用できる図書の種類がかなり限定されていることや、本棚と本棚の間隔が狭いことなどにより、安全に歩行できるとはいえない通路があることなどが分かりました。また、館内で、弱視の人にとっては明るすぎたり、又は暗すぎたりする場所があるなど、調査によって初めてはっきりと認識する問題点もありました。さらに、意識の面でのバリアも見られました。館内には点字教科書がありますが、これらは、他の教科書が置かれている場所とは別の場所にあり、視覚しょうがい者向けの図書として、まとめて保管されています。

調査で分かった問題点全てを解決することはできませんが、工夫によって、視覚しょうがい者にとって利用しやすい図書館の環境を整備することは可能だと思います。例えば、本棚の下の方に、サイズが大きい本通路にはみ出している本がありましたが、大きい本を別の場所に移すなどして、しょうがい物が無い通路にすることで、視覚しょうがい者に限らず、多くの人にとって歩きやすくなります。対面朗読のサービスは、ボランティアの協力などがあれば、実現可能といえると思います。対面朗読とは、活字が読めない人や視覚しょうがい者に対して、朗読者が本を代読することです。明るさについても、昼と夜での照度の違いに個別で対応できる体制を整えるなどの検討は必要ですが、照明やブラインド、カーテンなどによって照度を調整することはできると思います。

私たち自身、日頃から附属図書館を利用しますが、今回キャンパスバリアフリープロジェクトに参加し、何気なく利用している大学の環境を、いつもとは異なる視点で考えることができました。とても貴重な経験だったと感じております。



図書館より

節電との兼ね合いの中で「暗くないかどうか」は常々気にかけておりましたが、「明るすぎる」という観点は意識しておりませんでした。照明設備改修の際に考慮させていただきます。また、書架からはみ出した本についてはご指摘のとおりですので、早急に対応を検討いたします。



聴覚しょうがい班

聴覚しょうがい班は、①館内アナウンス・エレベーターの音声案内②ビデオ・DVDコーナー③窓口対応④災害時の4つのバリアの調査をしていきました。

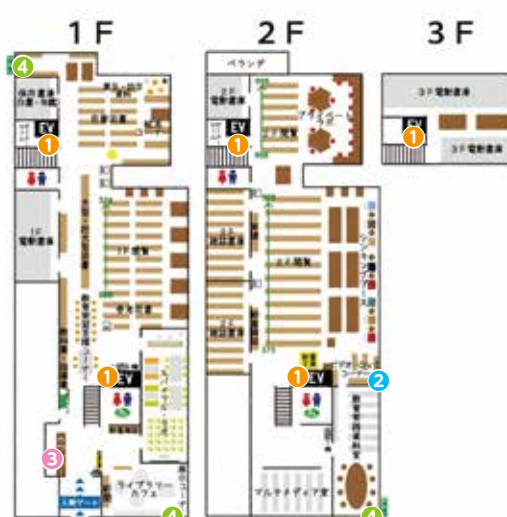
エレベーターには、音声案内や災害や故障などの非常時に外部に連絡するスピーカーはありましたが、聞こえない人にとっては聞き取れないために、外部との連絡手段がなく意味がないということが分かりました。改善案としては、「災害時の避難はエレベーターではなく、階段を使用してください。」などのエレベーターについての注意を視覚的に分かるようにし、それを踏まえて利用するように呼び掛けることが挙げられます。

ビデオ・DVD コーナーには、図書館による購入物や寄贈物があります。それらの物に字幕が付いておりませんが、過去にリクエストがあったため、対象の物に字幕を付けたことがあることが分かりました。全ての物に字幕が付いていないという問題を改善するために、聴覚しょうがい者が見たいビデオや DVDに字幕を付けるよう自己申請すること、利用状況や請負者などを検討した上で図書館と協議することが必要だと考えられます。

また、窓口対応では、筆談ボードがあることを知ってもらうために張り紙をしたり、筆談が可能である耳マークなどを設置したりすると良いと考えられます。

そして、災害時の避難方法として、聴覚しょうがい者はアナウンス通りに避難することが困難であるため、床や壁に矢印を貼り避難場所まで誘導できるようにする必要があります。

最後に、図書館について調査する前まで、いかに聴覚しょうがい者にとって快適かつ安全である場所であるかどうかは考えたことがありませんでした。そのため、キャンパスバリアフリープロジェクト学生委員として聴覚しょうがい者の困難、不便性について調査してみたいと思いました。調査により、聴覚しょうがい者には幾多の困難、不便性があることが明らかになりました。そこで、私たちに改善案を考えてみました。聴覚しょうがいの有無にかかわらず誰でも快適かつ安全である場所になることを切に願います。



4つのバリア

図書館より

災害時の避難誘導マニュアルに、聴覚しょうがい者への配慮について特に記載がなかったため、アナウンスや声がけだけではなく直接的な誘導方法について検討しています。また、館内のサインについては順次改善を行っていきます。



肢体不自由班

●活動の様子

肢体不自由者役の人が車いすに乗り、図書館入り口から雑誌書庫、マルチメディア室、視聴覚ルーム、トイレなど図書館内全体を回りました。肢体不自由者役は基本的には一人で移動しましたが、移動が困難な所は介助者役の人が手伝いました。そしてそこで見つけた問題点を写真や動画に収め記録しました。

●調査の観点

今回の調査をするにあたって、肢体不自由者が一人でも図書館を利用しやすいかどうかに着目しました。そして肢体不自由者にとって困難に感じるであろう場所を探しました。図書館内の移動や学習する際の困難だけでなく、トイレやエレベーターなど図書館内の設備も十分に利用できるかも調査しました。

●改善すべき点と改善案

①通路の幅が狭く、車いすでは通りにくい点。学習机や本棚の間にある踏み台が邪魔になったり、棚に収まりきれていない本がぶつかったりする。

- ◎改善策→・踏み台を置いておく場所を決め、使用後は所定の位置に戻すようにする。
- ・サイズが大きい本は別にまとめて収納する。



②本棚の高い所にある本が届かず、見えにくい点。1,2階フロア、2階雑誌書庫ともに手が届く範囲は本棚の中段まで。

- ◎改善策→・車いすに乗った状態では届かない棚を写真で撮り、各棚の横にカードとしてぶら下げておく。



③マルチメディア室や書庫の入り口が狭い点。段差があったり扉が勝手に閉まったりするため、介助者なしでは入りにくい。

- ◎改善策→・マルチメディア室の扉にストッパー機能を付ける。
- ・書庫の入り口付近にある凹凸部分にマットを敷いて段差を緩やかにする。



●メンバーの感想

今回の調査を通して、踏み台や学習机などの位置により、全体的に通路の幅が狭くなっていると感じました。また、図書館内にある部屋の出入りも一人では困難だと思います。車いすが通ることを想定してできるだけ通路幅を広げ、移動しやすい工夫が必要だと感じました。

図書館より

踏み台については利用者の方の利便性を考慮しつつ、運用方法を検討いたします。通路幅や書架の高さ自体の改修については、収蔵スペース確保や改修規模の観点から速やかな対応は難しいところですので、今後の学内改修の際に施設担当とも検討し改善を図って参ります。



■企画展

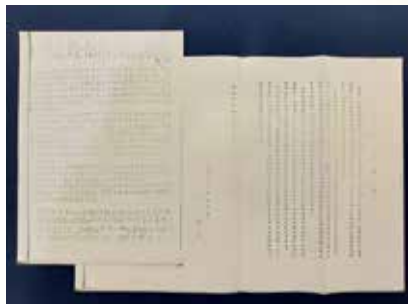
学び続ける 教師を育てる



林竹二は、教師の仕事「学ぶこと」と捉えて、本学の教師教育改革を進めた第三代学長です。子どもの事実を創る「教授学」を構想した斎藤喜博、「すべての子どもに高いレベルの科学をやさしく教える」授業の創造を目指した高橋金三郎らとともに学問と教育を積み重ねました。その財産は、「学び続ける教師」の育成を使命とする本学の原点となっています。昨年開催されたこの企画展(2019年7月8日～8月10日、附属図書館1F展示ホール、企画監修・吉村敏之教授)は、林竹二らの功績を紹介し、教師として学ぶべきことは何かを改めて考えるものです。ここでは展示資料とともに、展示の意義を振り返ります。

✎ 林 竹二とは

林先生は、行動力のある人、学生目線に立てる人でした。学長就任から間もなく直面した学園紛争(戦後日本の社会運動)では、学生と正対して話し合いで解決に導き、教育と研究という共通の課題を教員と学生が対等に討論する全学集会を開きました。また、大学を統轄する学長の権限は教職員や学生の絶えざる批判のもとに行使されるべきだと考え、「リコール制」を導入しました。そして、教育現場で生じる問題に対応できる教育実践を対象とする「教育における臨床の学」(一例として教授学)の必要性を説いたのです。「授業の専門家」である教師の育成に責任を負う大学を創るべく改革に取り組みしました。



[左] 闘争圧殺=前期試験を粉碎せよ! 1969(昭和44)年
[右] 学長声明 1969(昭和44)年



小学校教員養成のための教育における二三の問題点と改善の方向について(私見) 1970(昭和45)年



『宮城教育大学広報』No.11(S45-3) 1970(昭和45)年

✎ 授業巡礼

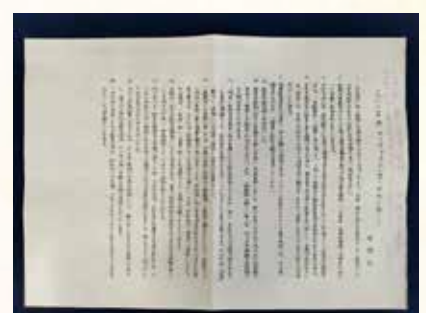
自身の授業への感想文から「子どもというものと、授業のもつ不思議な力」に強く心打たれた林先生は、全国各地の学校へ授業巡礼の歩みを始めます。貧困や差別など様々な要因で恵まれない環境にあった生徒たちへ授業を行い、学ぶことに飢え、自分を賭けて学ぶ姿にふれます。絶望的な状況の中に光を見出した林先生は、授業の事実の中で学ぶとは? 授業とは? 教師とは? といった思索を著しました。その著作は、今もなお教育関係者に多大な影響を与え続けています。



人間について 授業感想文
郡山市立白岩小学校6年生 1971(昭和46)年



人間について 授業感想文
兵庫県立湊川高等学校 1977(昭和52)年



1981年度カリキュラム(案)作成に際して
兵庫県立湊川高等学校教務部 1981(昭和56)年

学び続ける教師の姿

教材研究を深めて、教えたいものを自らの内側に創り上げ、子どもと問題を追求する授業を「創造」する姿勢を林先生は貫きました。子どもの内に深く蔵された「たから」を引き出すには、教師の学問が不可欠だと考えたのです。ギリシア哲学や田中正造などの研究を生涯続け、その成果が授業に反映されました。本学が目指す「学び続ける教師」の姿が、体現されたのです。



開国 授業プラン(那覇市立久茂地小学校)
1978(昭和53)年



田中正造研究資料群



[左] 自著への書き込み
[右] 森有礼研究第一、第二ファイル

斎藤喜博との交わり、高橋金三郎との歩み

子どもたちの事実を見つめて記録することを重視し、子どもの可能性を引き出す授業を創る教師たち。教師の研究集団が組織されて専門性が高まる「学校づくり」を群馬県の島小学校長として行った斎藤喜博を林先生は本学に招き、授業の事実をふまえて研究する「教授学」構築を目指しました。また、科学の本質をわかりやすく子どもに教えるテキストを現職の教師たちと作って授業する極地方式研究会を立ち上げた高橋金三郎とともに本学の礎を構築します。こうした子どものための授業の追求は、全国的にも注目された研究施設であった授業分析センターの設置、現職教員のための大学院を全国で最初に構想する動きとなり、現在の教員キャリア研究機構や教職大学院の理念へと受け継がれています。



『島小実践報告』 群馬縣佐波郡島小学校
第8集 1955(昭和30)年、第1集 1953(昭和28)年



『授業分析センター研究紀要』第1号 1975(昭和50)年



昭和四六年度卒業生にたいするはなむけのことば
『学園だより』第11号 1972(昭和47)年

学ぶべきは何か

教育に関する物的技術は進歩し、社会環境も変容し、求められる教育も変化していきます。大事なことは、絶えず自分のあり方を問い、自分を作り変えようと学び続ける姿勢、子ども一人ひとりの宝物を最大限引き出そうとする情熱と絶え間ない努力です。林先生も斎藤先生も高橋先生も、それぞれが子どもの事実をふまえ、高い志と熱い思いをもち、自分の歩むべき道を見つけ、子どもにとって最適な授業のあり方を追い求めました。先生方が残された貴重な資料や著作が附属図書館には所蔵されています。若い皆さんもそれらを手に取って先人たちの意志を感じ、自らの理想を追い求めてください。林先生が求めた「人間が人間になるための教育」は、学び続ける生きた人間が創るものです。教育の財産が本学には遺されています。

今年度の企画展は7月から開催予定です。ご期待ください。

第29回

My Favorite Books

学生の読書室

「みんな仲良く」という重圧に苦しんでいる人へ
全国1000人以上の先生が選んだ、中高生にいま一番読んでほしい本



『友だち幻想— 人と人の〈つながり〉を考える』

菅野仁、筑摩書房、2008年3月



初等教育教員養成課程 家庭科コース4年 須田 和里

学校で理想とする子供とはどのような姿だろう。

明るく元気で友達がたくさん、そんなことを小さい頃から意識付けられてきたように感じる。しかし、暗い、おとなしい、友達が少ないということはいけなことなのだろうか。私たちが子供だった頃よりも、ライフスタイルが多様になった今、様々な子供が学級にいることを自覚していたい。そんな学級の中で「みんな仲良く」を求めることは却って、同調圧力となったり、自己嫌悪を抱かせたりするかもしれない。人と人とのつながりをどのように捉えれば良いのだろうか。考え方の方向性や考えるためのキーワードを本書は与えてくれる。

「苦手な相手とは無理に仲良くなろうと頑張らなくても良い」「どんなに仲が良い友達でも100%理解できる友達なんてありえない」「気の合わない人とでも一緒にいる作法を身に付けることが必要」「挨拶をするだけの関係性も距離の取り方の一つ」など、人間関係における幻想に気付かせてくれる一冊。



今夜、ぐっすり眠れますように…

『寝る前に読んでください。』

佐藤光浩、アルファポリス、2010年2月



大学院修士課程 国語教育専修1年 菊田 佳那

本のタイトル『寝る前に読んでください。』の通り、一日の終わりに読んでいただきたい一冊です。この本を手にとると、その日あった嫌なことや上手くいかなかったことがちっぽけなことに思え、明日からまた頑張ろうと安らかな気持ちで一日を終えることができます。

小さな思いやり、小さな努力、小さな優しさ、小さな奇跡。世界中に転がって

いた心温まる実話の物語がこの一冊に集まっています。それぞれのストーリーが短いため読み切りやすく、読書が苦手な人にも是非手に取っていただきたいです。

シリーズものになっており、現在第二巻も発売中です。一度読み始めるとハマってしまい、第二巻も買いたくなってしまうこと間違いなしです！



忘れてはいけない子どもたちの「真」の学び



『学びのゆくえ— 授業を拓く試みから』

牛山栄世、岩波書店、2001年5月



教職大学院 高度教職実践専攻1年(附属小学校教諭) 遠藤 宏紀

“子どもたちと同じ「当事者」の視点を忘れずに、授業づくりをしていますか。”

本書は、長野県の小学校教師牛山栄世が「生活科」「総合的な学習の時間」の実践を通して、子どもたちと紡いできた「学びの事実」を描いた一冊である。

ヤギやヤドカリの飼育、稲作・・・子どもの思考を揺さぶる体験の数々。「ことば」だけでは学べない経験の中で、「学びの内実」が子どもたちに刻まれ、変容していく姿が克明に記されている。

一恐るべきことは、教師が時流に埋没し、状況を問う「目」すら失くしてしまうこと—

こんな時代だからこそ、子どもたちと教師が共に感じ、考え、「共に在る」事実から、互いの根を紡ぎ合わせ、「全体」が成り立っていく学びについて、もう一度見つめ直す必要があるのかもしれない。子どもたちと共に「成り立つ」実感が生まれる授業の在り方について、この本から考えてみませんか。

生きづらさを抱える人へ



『自分の感受性くらい— 若松英輔特別授業』

若松英輔、NHK出版、2018年11月



初等教育教員養成課程 国語コース4年 木村 翔梧

この本を読むきっかけとなったのは読書好きの叔父の薦めからだった。普段ほとんどと言ってよいほど読書とはかけ離れている、そんな私の性質を加味して薦めてくれたものだ。この本は若松英輔氏が中学生に向け、詩人茨木のり子の生い立ち、詩を基にした授業を文字化したものである。是非読書嫌いの方にこの本を薦めたい。本の中で紹介されている詩の持つ力、飾らない真っ直ぐな言葉から生活の中の幸せ、生きるということの価値を再認識させられた。

掲載されている詩の中の一つに、「自分の感受性くらい」というものがある。自分の中に溢れる様々な感受性を自分のものとして受け止め、守り、大切にしていきたいと、この詩を読んで強く感じた。またこの本の中で、詩を読むことに加え、自らの言葉で詩を書くことを勧めていた。私にとって斬新な詩に対するアプローチであると感じた。自分の言葉を大切に、思いを表現する経験を今後の学生生活そして将来の糧としていきたいと思った。

原稿大募集

「こもれば：宮城教育大学附属図書館ニュース」は皆さんの投稿で成り立っています。特に「学生の読書室」は、学生の皆さんにお薦めの本を紹介してもらうコーナーです。読後の感想や想いをこの場で表現してみましょう。

下記の必要事項を記入の上、Eメールに文書を添付してお送りください。いつでも原稿募集中。ご投稿お待ちしております。

必要
事項

- ☒ コース・専攻、学年、お名前、連絡先
- ☒ 紹介したい本のタイトルとその著者名、出版社、ISBN
- ☒ 紹介文(400字程度)

提出
方法

- ☒ 次のメールアドレスあてに提出してください。
toshokan@staff.miyakyo-u.ac.jp

注意
事項

- ☒ こもれば次号は2021年3月発行予定です。 ☒ 原稿は、こもれば編集委員会で選定の上、掲載します。
- ☒ 採用された原稿は図書館ホームページにも掲載されます。

子ムエの本棚



子ムエの本棚は、児童書に関する話題をお届けするコーナーです。今回は、2019年度に学内で開かれた児童文学に関する研究フォーラムを紹介します。この研究フォーラムでは、児童文学が子どもを理解するためのヒントになるのかという問いのもと、灰谷健次郎、古田足日、宮川ひろ、那須正幹の作品が取り上げられました。

児童文学というヒント —灰谷健次郎からはじめて—

2019年12月3日(火)、本学5号館の未来の教室で、大阪国際児童文学振興財団理事長の宮川健郎氏を迎えて研究フォーラム「児童文学というヒント—灰谷健次郎からはじめて—」が開催されました。これは、本学国語教育講座の教員による研究プロジェクトが主催したもので、児童文学を活用した初等教育教員養成の可能性を探ることを目的としています。主に初等教育教員養成課程の国語コースおよび子ども文化コースの学生30数名が灰谷健次郎の作品「だれも知らない」を事前に読んで参加しました。この研究フォーラムのプログラムのうち、宮川健郎氏による講演の概要を国語コースの4年生がまとめます。参加者の感想・意見も紹介します。



講師 大阪国際児童文学振興財団理事長
宮川 健郎 先生

0 宮川健郎先生の自己紹介

講演の最初に、宮川健郎先生は、次のような自己紹介をしてくださいました。

宮川健郎と申します。児童文学の研究とか批評の仕事をしています。この春、家庭の事情で大学の専任教員を定年よりも2年ほど早く辞めましたが、この宮城教育大学が最初の勤め先で、27歳で勤めて42歳まで15年間いました。この15年間は、私にとって本当に大事な時期で、大学の教員としても、研究者としても、あるいは人としても、自己形成期をここで過ごしました。

1 灰谷健次郎というヒント

続いて、資料の確認が行われました。配付されたのは、児童言語研究会の雑誌『国語の授業』の特集「灰谷健次郎を読む」(1999年2月)に宮川先生が発表された「灰谷健次郎というヒント」という文章です。この資料を活用しながら、ま

ず、事前に私たちが読んできた灰谷の作品「だれも知らない」の評価についての説明がありました。

「だれも知らない」は、筋肉の力が普通の人の十分の一くらいしかないため200メートルを40分かけて歩くという、誰も知らない麻理子の朝の時間を描いた短編です。これは、灰谷の児童文学の中でも、とても評価の高い作品だということでした。小学館文学賞を受賞した作品集『ひとりぼっちの動物園』(あかね書房、1978年)に収録されていますが、同賞の選考委員の滑川道夫は、「この一作だけでもたいへんなものだ。これだけでも賞にあたいする」と言ったそうです(インタビュー 神宮輝夫『現代児童文学作家対談7 今江祥智・上野瞭・灰谷健次郎』偕成社、1992年)。

しかし、「だれも知らない」に共感し評価する読者の読みを相対化するような意見もあるといいます。「我々は麻理子の生から一方的に“学ぶ”しかない」と述べ、この作品への感動を突き放して考えた藤田のぼるの問題提起(「だれも知らない」、『季刊児童文学批評』1983年8月)が紹介されました。そのうえで、宮川先生は、「私たちは、藤田のぼるのことばに我にかえり、作品を相対化しはじめる」が、「灰谷健次郎自身

は、決して我にかえるわけにはいかないのだろう」と語ります。灰谷は、麻理子のモデルとなった子どもをはじめ、様々な子どもたちと出会っていく中で自分を何とか立てていった人、子どもへの共感が自己肯定につながっている人だったから、子どもへの共感を簡単に手放すわけにはいかないのだということです。その結果、灰谷の作品世界はふくらみのないものとなり、人々の共感を得ると同時に批判も得ることになります。清水真砂子の灰谷健次郎論『『良心』のいきつくところ』（『子どもの本の現在』大和書房、1984年）の紹介もありました。

このように灰谷文学の特徴をおさえてから、宮川先生は、「藤田さんの意見とか清水さんの意見というのは非常に大事だと思うのですが、そのことも含みながら灰谷健次郎をヒントとして捉えたい」と語りました。「ヒント」とは、「子どもをどう見るかというヒント」であり、「子どもと一緒にこの世界を生きている私たちが、どう生きていくかのヒント」であるということです。灰谷は子どもから得た気づきを書き、その気づきを得た灰谷の姿から私たちは気づきを得る、だから灰谷健次郎は私たちに「ヒント」なのだということでした。また、灰谷が本学の第三代学長・林竹二との対談『教えることと学ぶこと』（小学館、1979年）を出していることにもふれて、「宮教大にとって灰谷は大事な人というか、宮教大の教育実践にも何らかの影響があったと考えられる、あるいはこれから影響を受けたい人とも思う」ともおっしゃっていました。

2 古田足日と宮川ひろの児童文学から考える

その後、「灰谷がヒントであるならば、児童文学というものがヒントなのではないか」、「児童文学はヒントになるのか考えたい」という方向にお話は展開していきました。取り上げられたのは、古田足日『宿題ひきうけ株式会社』（理論社、1966年）と、宮川ひろ『先生のつうしんぼ』（偕成社、1976年）、「しゅくだいグループ」（『日本児童文学』1970年11月）です。これらの作品について、物語内容の紹介があったうえで、古田足日『宿題ひきうけ株式会社』と宮川ひろ「しゅくだいグループ」の宿題観の違いが語られました。そして、この違いは、古田足日と宮川ひろの子ども像の描き方の違いであるとともに、子どもたちの現実、読者の現実には作家がどう寄り添うかというスタンスの違いの問題でもあるという解説が加えられました。

古田足日の方は、宿題ということを通して、子どもたちをめぐる現実を相対化して批判して見せている、と宮川先生は言います。一方、宮川ひろの方は、子どもたちの現実の内側に入り込んでしまって、現実を容認しながら考えていっているそうです。このように、この二作品には子どもへの寄り添い方の違いがあり、どちらが「子どもをどう見るかというヒント」となるのか、どちらもヒントなのか、考えていかなければならないというお話でした。

なお、「しゅくだいグループ」は、宮川先生が小学生の時に実際に友だちと行ったことを、お母様である宮川ひろさんがそのまま書いたものだという裏話も語っていただきました。

灰谷健次郎と林竹二 ～宮教大とのつながり～

初等教育教員養成課程
国語コース4年 小船 大宗

「今回の研究フォーラムで取り上げられた灰谷健次郎と、私たち宮教大生が地続きの関係にある」と言ったら、あなたは思うだろうか。

我々が林竹二元学長と灰谷との間に深い交流があったことが、本学附属図書館2階電動書庫の「林文庫」に保管された林先生の本から分かった。右の写真は、灰谷の直筆サインの入った本と、その中に同封されていた手紙の一部である。林先生とその奥様を気遣う様子や、当時の互いの出版物について柔らかく論じる様子が見受けられた。

また、この手紙のやりとりの二年後には、二人の対談『教えることと学ぶこと』（小学館 1979年11月）なども発表されている。林竹二について勉強する学生の中には既読の者も多いのではないだろうか。

灰谷は林竹二と深くつながっており、林先生の教えの延長上に私たち宮教大生は息づいている。初めの問いが過言か、それと目的を射ているか、それはぜひ皆様の目で確かめてほしい。今回話題にした本は全て宮教大図書館に所蔵されているのだから。





3 現代児童文学の展開からみえるもの

灰谷健次郎は1974年に『兎の眼』（理論社）で作家デビュー、古田足日は1961年に発表した『ぬすまれた町』（理論社）から作家としての活動を始めました。宮川ひろは1969年に『るすばん先生』（ポプラ社）で作家デビューしています。この三人はいずれも現代児童文学出発期の作家たちだと宮川先生は述べて、次に現代児童文学の成立について説明してくださいました。それをまとめると以下のようになります。

日本の子どもの文学は、大づかみにいうと、童話から現代児童文学へと変遷した。では、童話とは何かというと、それは詩的で象徴的な言葉で心象風景を描くような世界といえる。詩的な言葉なので、作品はみな短編となる。小川未明の「赤い蠟燭と人魚」や、宮沢賢治の「銀河鉄道の夜」などがその例である。それが1960年前後になると現代児童文学に変わる。散文的な言葉で、子どもという存在の外側に広がっている社会とか、社会と子どもの関係を描くような長編になった。どうして変わったのかというと、十五年戦争と呼ばれる非常に長い戦争を敗戦の形で終わらせた日本において、子どもの文学は、どうしても戦争とか、戦争を引き起こす社会という問題とかを語らないわけにはいかなかったからである。それが戦後の児童文学の新しい主題となった。そういう社会とか戦争とかの問題は、詩のような言葉では書きにくい。そこで、それらが説明できる散文性を獲得せざるを得なくなった。このような現代児童文学をデザインした評論家が古田足日で、散文性の獲得ということを行ったのも古田である。こうして、現代児童文学は散文性を獲得し、社会と子どもの関係を書けるようになった。その中で、『宿題ひきうけ株式会社』『兎の眼』『先生のつうしんぼ』も生まれてきた。

宮川先生は、以上のように近代童話から現代児童文学への転換を説明し、その出発期の作家として灰谷健次郎、古田足日、宮川ひろを位置づけました。そのうえで、「現代児童文学はもう一回転換する」と話を続けていきました。1980年前後になって「曲がり角」が来るそうです。「曲がり角」を作った作家の代表は那須正幹で、那須は現代児童文学の出発期の作家が書かなかったテーマをどんどん書いていった、書きぶりも大分違ったということです。その那須正幹の作品の中でも、今回の「児童文学というヒント」という話題との関連

で、『うわさのズッコケ株式会社』（ポプラ社、1986年）を取り上げて、宮川先生は解説してくださいました。

那須正幹『うわさのズッコケ株式会社』は古田足日の『宿題ひきうけ株式会社』を連想させる作品ですが、お金をもうけるというテーマを書いたことに新しさがあり、『宿題ひきうけ株式会社』とはまた違う世界を開いているそうです。「現実の中に主人公の三人組を飛び込ませてマネーゲームをさせるということをどうして描けたのか」という点について、宮川先生は次のように説明されました。

「書きぶりがちょっと違いまして、ただのリアリズムではないんですね。三人組というキャラクターをたてて、ちょっと大げさな文体をあえて使ってズッコケ世界を作ることによって（上記の点）が可能になった。方法の問題がここに絡んでくると思います。」

『うわさのズッコケ株式会社』の特徴を語ったところで、今回の講演はまとめに入りました。

4 まとめ

宮川先生は、講演を次のようにまとめられました。

「ヒントとか、気づきとか言っていますが、何をどういうふうに見ていくのかという問題と、それをどういうふうにして作品として書き表していくかという方法の問題と、そこには児童文学の主題と方法の問題がもちろん絡まっています。これらがぼくらにとって様々なヒントになるのではないかと、この問題提起を今日はさせていただきます。」

宮川先生の講演は、今後教員になっていく私たちにとって、刺激的で考えさせられるものでした。東京から宮城までお越しくださって貴重なお話をしてくださった宮川先生に、心より感謝申し上げます。ありがとうございました。

（国語コース4年：黒沼、小船、後藤、文谷、向中野）





「自己肯定」というキーワード

国語教育講座 教授
児玉 忠

私自身は、灰谷健次郎ドストライク世代です。高校時代、まさに灰谷健次郎大ブームで、みんなが読んでいる、そういう時代を私は生きました。ところが、高校で大好きだった先生にそういう話をしたら、「うん、でもね児玉君、灰谷は超えなければならない」と言われました。何を言っているのか、意味が分からなかった。日本中が灰谷の文学に感動して、生きているうちに全集が出て、というような作家だったのに、その先生はちょっと違うことを言って、ずっとそれが引っかかっていました。

その後、大学で詩の研究をし、その研究を続けて教員となり、学生たちに灰谷を紹介するようになりましたが、その中で宮川先生のお話にも出てきた清水真砂子さんの評論「[良心]のいきつくところ」に出会います。清水さんは「灰谷健次郎は残酷な作家である。あるいはむしろ冷酷な作家である」「人のやさしさをうたいつづける灰谷に、私はずっと人を斬る冷たさを感じつづけてきた」と言います。これは、子どもを徹底的に持ち上げる一方で大人たちを徹底的に批判するということ、人間を分断して対立的に描くということです。灰谷に感動したということは、人間を二分化するものを丸ごと受け入れて感動しているということだと気づかされました。これをどう受け止めていいのか、いまだにこれは宿題です。が、今回、灰谷がなぜそういう描き方をするのか考えるヒントが宮川先生の灰谷論の中にあると思いました。

宮川先生の灰谷論のキーワードは「自己肯定」でした。灰谷は、子どもを描くことによって自己肯定したいのだ、自分を肯定するために子どもを肯定するのだということでした。これには納得しました。人は全員かつて子どもでしたし、人はみな自分を肯定したいと思っています。灰谷の文学の奥には、そういう子どもだった自分に対する自己肯定がある。灰谷文学の引力の強さ、その呪縛から逃れるのは難しいということを、今日、改めて考えさせられました。

児童文学だからこそ可能なこと

仙台白百合女子大学講師・本学非常勤講師
大木 葉子

灰谷健次郎の「だれも知らない」を今読んでみると、古さといいますが、やや時代性を感じることは事実ですが、一方でその表現方法は多くの気づきをもたらしてくれると考えられます。私たちが普段見逃している美しい世界の存在を改めて痛感させてくれるのです。そうした点に目を向けた時、本作品はいつまでも我々に気づきをもたらす有効な作品としてあると思います。

こうした障害の問題を描く場合、ドキュメンタリーや実践的な報告の方がより現実を描くことが可能となると考えることもできますが、今回「だれも知らない」を読み返してみて、こういう形でなければ、実際にその人たちがどう見ているかを描くことができず、対比もできないと感じました。児童文学であること、そして詩ではなくストーリーを構成したということによって可能となったことがあったと考えます。

学生による感想

- 「だれも知らない」は町行く多くの誰よりも麻理子が一番充実した200mを歩いているなと感じた。改めて児童文学はその時の社会背景が非常に反映されているものだということを感じた。
- 児童文学が子どもたちへの寄り添い方のヒントになるという点が興味深かった。作品を通して自分だったらどのレベルで子どもたちと関わるかを改めて考えるきっかけになった。
- 子どもへの気づきを描くことで灰谷健次郎自身の自己肯定に繋がっているのは新しい発見だった。作者の描き方、書かれ方を見ることができてよかった。
- 現実の経験ではなく、作品の中でしか得られない経験があるという考えは分かるような気がする。また作家の残酷性にまで目を向けられるようなことはすごいと感じた。



学修サポーターに 聞いてみよう!!



相談デスクでの各種サポート
(平日午後2:30頃～)



掲示板での
情報提供



スパイル・セッション



館内見学ツアー

学修サポーターとは？

先輩の学生が「サポーター」として、図書館の効果的な利用法や、大学での勉強の仕方、レポート添削など、みなさんの学生生活のお手伝いをします。

学生同士なので気軽に相談してみてください！

こんな質問におこたえます！

情報検索



どこにどんな本があるの？
レポートで使いたいのに～

一緒に本を探しましょう！
一つのテーマでも切り口は
たくさん。
論文検索もお手伝いします！



レポート・論文の書き方



レポートの提出期限が
近づいてきた！
でも、このレポートで
大丈夫かな…？

学修サポーターは
レポート添削も行っています。
文献の示し方、書き方など丁寧
に添削して一緒に考えます！



情報機器の使い方



どうやって
自分のパソコンから
印刷するの？

図書館のプリンターで印刷する
方法を一緒に設定しましょう！
様々なトラブルにも対応します！



学修相談



実習に向けて何を
すればいいの…？

学修サポーターは実習を
経験した先輩です！先輩として
たくさんのことを教えます！



新入生のみなさんへ

学生生活はあっという間です。一人で悩まず小さなことでもまずは相談してみましょ！学修サポーターはなんでもサポートします！

いつでもサポーター席に来てください。
お待ちしております！！



Mission!!

スタンプラリーで 図書館を使いこなそう!

館内のチェックポイントをまわり、設置されているカード(または該当する資料、撮影画像)をもってカウンターでスタンプをもらおう! 集めたスタンプ数に応じて、図書館グッズをプレゼントします!
図書館の基本的な使い方を自分のペースで学びながら、グッズももらえるチャンスです。お見逃しなく!

Mission
1

多読資料を
借りてみよう!

Mission
2

電動書架を
動かしてみよう!

Mission
3

最新の教科書を
読んでみよう!

Mission
4

自動貸出装置を
使ってみよう!

Mission
5

気になる
絵本や児童書を
借りてみよう!

Mission
6

ベストリーダーを
調べてみよう!

Mission
7

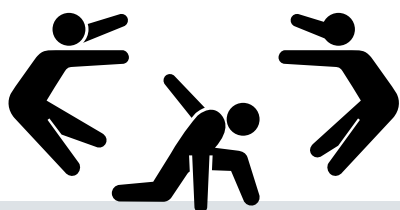
辞典や事典を
使ってみよう!

Mission
8

電子黒板を
使ってみよう!

Mission
9

展示コーナーの
資料を
借りてみよう!



Mission
16

学修サポーター
からの課題に
挑戦してみよう!

Mission
17

図書館での
イベントに
参加してみよう!

Mission
18

マイライブラリで
ブックマークを
使ってみよう!



スタンプ5個で
GET!



木製しおり3種
(杉・ひのき・ウォールナット)
いずれか1つ

スタンプ15個で
GET!



携帯用はさみ・ステープラー・メジャー
いずれか1つ

スタンプ20個で
GET!

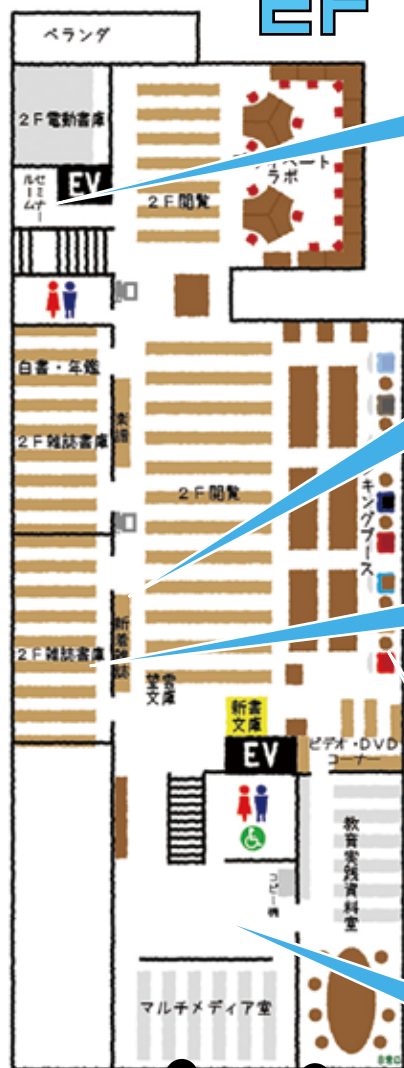


キャンバストートバッグ2種
(ナチュラル・紺)
いずれか1つ

スタンプラリー実施期間:4月1日~7月31日



2F



Mission
10

セミナールームに
入ってみよう!

Mission
11

気になる
学術雑誌を手
取ってみよう!

Mission
12

製本された雑誌
『教職研修』を
探してみよう!

Mission
13

気になる椅子に
座ってみよう!

Mission
14

バランスボールで
ストレッチ
しよう!



3F



Mission
15

小学生のころに
使っていた教科書
を探してみよう!

図書館は、
本を読む場所だけでは
なく、様々なイベント
も開催しています。最新情
報はホームページや館内の掲示、
SNSで発信していますので、
定期的にチェックしてく
ださいね。



Mission Complete!!

Mission
19

借りた本の
感想を書いて
みよう!

Mission
20

図書館の
SNSアカウントを
フォローしよう!



Twitter



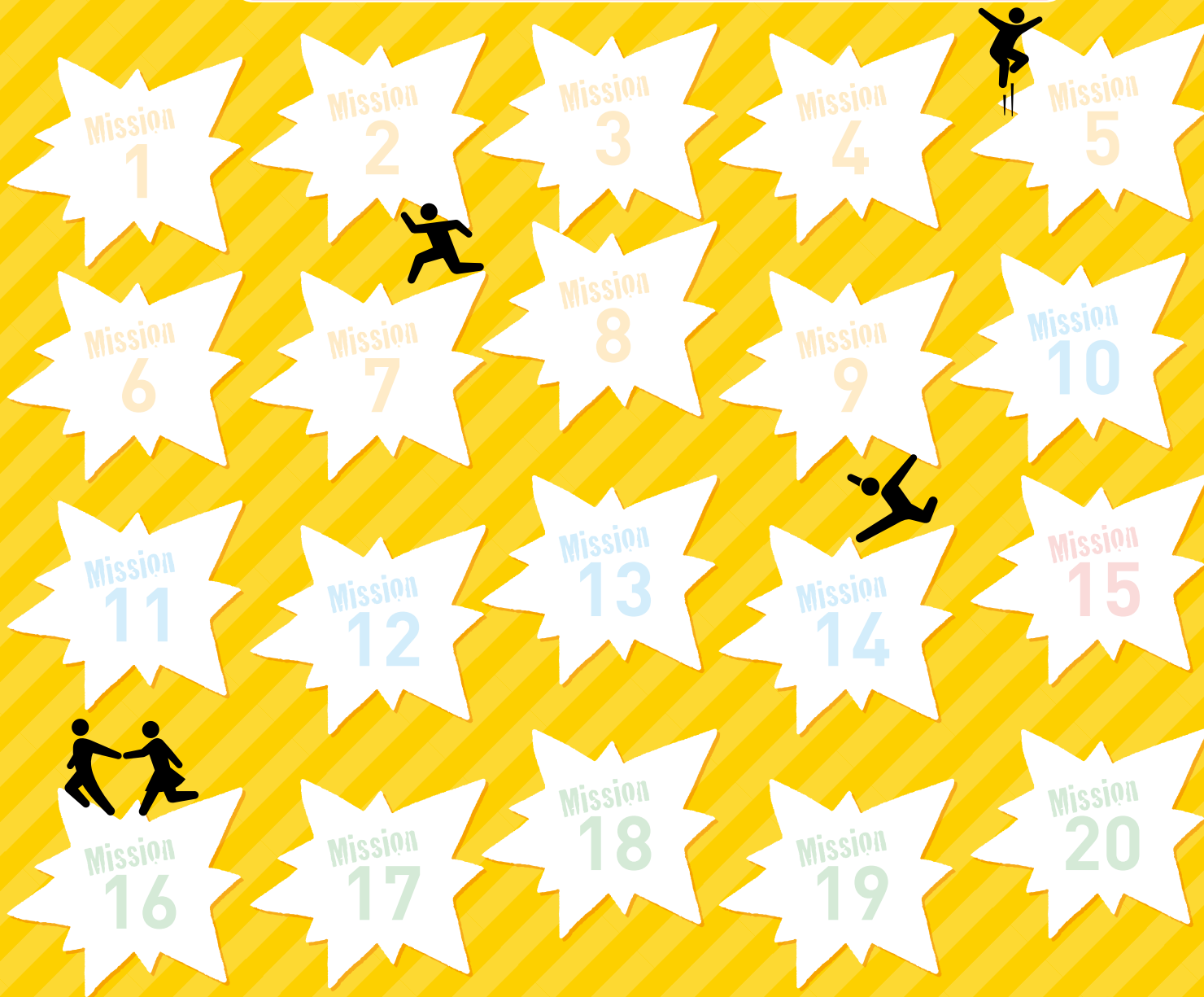
Facebook



トショカン スタンプラリー



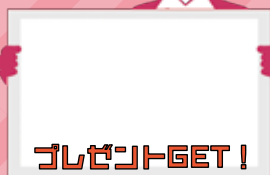
スタンプラリー実施期間:4月1日～7月31日



＼スタンプをためて/
**グッズを
GETしよう!!**



スタンプ
5個



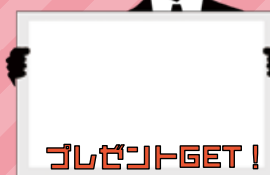
プレゼントGET!

スタンプ
15個



プレゼントGET!

スタンプ
20個



プレゼントGET!



宮城教育大学附属図書館

〒980-0845 仙台市青葉区荒巻字青葉149

TEL:022-214-3350

E-mail:toshokan@staff.miyakyo-u.ac.jp

こもれび No.135

附属図書館オフィシャルサイト

<http://library.miyakyo-u.ac.jp/>

【編集発行】
宮城教育大学附属図書館
運営委員会



このパンフレットは環境に
配慮した「水なし印刷」により
印刷しております。



環境にやさしい植物油インク
「VEGETABLE OIL INK」で
印刷しております。